

淑徳大学短期大学部研究紀要第57号 (2017.10)

幼稚園における指導計画の作成と保育の展開 — 予想される子どもの姿に着目して —

鈴木 香奈恵

(2017年9月25日受理)

要 旨

幼稚園における指導計画の作成と保育の展開について、現場の実践を観察し、保育者へのインタビューをすることで詳細に検討した。絵画指導の場面において、あらかじめ予想した子どもの姿が実際はどのように現れてくるのか分析し、保育者が保育を振り返った内容と合わせて考察した。保育者は、指導計画を立案する際に予想した子どもの姿を考慮して多様な援助をしたり、予想外な子どもの活動にあわせて適時に判断して援助を行っており、子どもの姿を予想して計画を立てることの重要性が示唆された。

キーワード 教育課程、指導計画、予想される子どもの姿、絵画指導、振り返り

1. はじめに

幼稚園における日々の保育は、計画に基づいて実践されている。幼稚園における計画には、子どもの入園から修了までの園生活全体を対象として目標や経験内容等を編成した「教育課程」と、教育課程を具体化しねらいや内容等を記した年間指導計画や、週案、日案などの「指導計画」がある。平成29年に告示された幼稚園教育要領¹⁾において、教育課程は「各幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする。」と述べられている。また、指導計画については「幼児期にふさわしい生活が展開され、適切な指導が行われるよう、それぞれの幼稚園の教育課程に基づき、調和のとれた組織的、発展的な指導計画を作成し、幼児の活動に沿った柔軟な指導を行わなければならない。」と記されている。

教育課程は、各幼稚園で園長を中心として保育者全員で、子どもの実態を踏まえ、発達を見通し、地域の実態を踏まえて独自に作成されるものであり、その園らしさが現れるものである。さらに、教育課程を基にして作成される指導計画もまた、幼稚園によって、作成する保育者によって様式も内容も様々である。子どもとのかかわりを振り返って、どのように子

1

どもを理解するかは保育者一人ひとりによって異なり、指導計画は子どもの実態を把握し、理解することを前提とするからである。

幼稚園教育要領第1章の指導計画作成上の基本事項と留意事項には、「幼児の興味や関心に応じてねらいを設定すること」や、「幼児の実態に即して指導計画の改善を図ること」や、「幼児の実態を踏まえながら工夫すること」が記述されている。このことから分かるように、幼児の実態を把握し、予測をし、指導計画を立てることは重要である。

保育者養成校においては、学生が指導計画の作成について学習し、教育実習では、作成した指導案をもとに指導実習を行っており、指導計画の作成を習得することは必須である。しかしながら、季節や子どもの年齢に適しているからという理由で、保育雑誌などの指導計画を安易に真似して利用することも見受けられる。学生が子どもの実態を踏まえて、予想しながら作成することは容易ではなく、現場の実践を題材にした研究の成果を指導に活かすことが求められている。

ここで、教育課程と指導計画に関する研究の動向をみると、教育課程の意義と編成方法に関する岡本・飯尾(1999)²⁾の研究や、教育課程と指導計画の関連について検討した門松・井戸(2006)³⁾の研究などがあるが、林(2011)⁴⁾は、1985年から2009年までの日本保育学会における教育課程や指導計画に関する口頭発表の割合が全体の0～2%であったことを報告しており、その数は多いとは言えない。

このような研究の背景のもとに、本研究では、幼稚園の絵画指導の実践を対象として、指導計画がどのように立案され、保育の実践につながり、保育者が振り返るのか、詳細に分析し検討をする。特に、計画時に予想した子どもの姿に着目し、実践における子どもの姿と保育者のかかわり、実践後の保育者の振り返りも含めて考察していく。

観察調査とインタビュー調査を実施し、詳細に分析することを通して、子どもの姿を予想して指導計画を作成し保育を展開していくことの意義と課題について探ることを本研究の目的とする。

2. 方法

(1) 対象園と絵画指導の概要

埼玉県内のA幼稚園は、園児数が110名であり、子どもの自発的な遊びを中心とした保育を行っている。行事や課題のある活動についても子どもの興味や関心をふまえ、一人ひとりの子どもが意欲的に取り組めるように配慮している。5歳児クラスでは特に、園外保育、地域とのかかわりなど多様な経験を通じた保育を実践している。

絵画指導は、5歳児クラスの子どもを対象としている。指導は、幼稚園教育要領に示されている表現〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。〕の領域であることを踏まえ、美術についての専門的な知識と技術を持つ園長を中心に内容を検討して実践している。子どもが描く技術を習得することを目的とするのではなく、興味関心を持って楽しく描くことを重視している。この

ため、子どもが興味を持てるようなテーマを選定し、そのテーマを子どもが楽しみながら理解できるように導いている。指導の際には、子どもの表現を認め、個々の創造力の育ちを大切にしている。

工夫している点は、子どもが描き出せるようにするための導入としてヒントの線をあらかじめスケッチブックに描いておくこともあることと、自由に描けるように机を使用せず床の上で描くように環境構成をしていることである。

平成28年度の絵画指導年間計画から月ごとにテーマを取り出して表1に示した。テーマは、前年度までの絵画指導実践を踏まえて、季節を考慮した内容を採り入れたり、この年度の子どもの実態を考慮して適していると考えられるものを選定している。5歳児クラスに進級する直前の3月には、スケッチブックではなく園庭の地面に描くことを計画し実践している。これは4月から始まる活動の導入となるものであり、子どもたちが自由にのびのびと取り組めるようにとのねらいから設定されている。

表1に記した年間計画の中から、9月の「イロイロトンボ」をテーマとした実践を本研究の対象とした。

「イロイロトンボ」の指導を展開するための指導案は、園長を中心として、指導にあたる4名で話し合って立案された。作成した指導案から、一部の内容を取り出して表2に示した。この中から、本研究では、予想される子どもの姿に着目して詳細に分析をしていくこととする。

表1 絵画指導年間計画 (テーマ)

月	テーマ
3月	・空に絵を描こう 庭に絵を描こう
4月	・ぼく わたしを額に入れて ・こんな鯉のぼりあるの
5月	・鯉のぼりを捕まえた ・雨降り ・宇宙人 ・カタツムリ
6月	・空を飛ぼう ・不思議な果物の木 ・雲に乗って
7月	・七夕飾り
9月	・イロイロトンボ ・オリンピック1
10月	・オリンピック2 ・アリの世界は ・ドンダリの世界は
11月	・穴から色が飛び出した ・名画 迷画
12月	・変な顔
1月	・製作 鬼のお面 ・鬼のお面 着彩

表2 指導案 (抜粋)

テーマ	「イロイロトンボ」
ねらい	トンボについて自分なりに想像し、描くことを楽しむ。
予想される子どもの姿	① テーマが抽象的で取り掛かりが分からない ② 知っている実物のようなトンボのように描けない ③ トンボの他の物を描きたい ④ トンボそのものに興味がない
環境構成	5歳児クラスの一つの保育室には机や椅子を置かず、子どもが自分のスケッチブック (F8サイズ) を床に置いてクレパスで描けるようにする。隣にあるもう一つの保育室には、4台の机の上に水を入れたバケツ4個、2種類の色を作ったバケツ4個、幅広筆8本、雑巾4枚を用意し、絵具で色を塗ることができるように準備する。

(2) 観察調査

対象

5歳児クラスの2クラスの子ども41名(男児17名 女児24名)と、指導者4名(園長、5歳児クラスの担任保育者2名、保育助手1名)を対象とした。

観察時間

平成28年9月12日(月) 午前9時半から午前11時まで

場所

5歳児クラスの2つの保育室を観察した。それぞれの保育室の環境構成については、表2の通りである。

観察方法

活動の妨げにならないよう留意して参与観察を行った。子どもの活動、保育者の援助について発話も含めて時系列に沿って記録用紙に筆記した。環境構成については、図を用いて記録した。また、発話を正確に記録するためにICレコーダーで補助的に録音をした。

分析方法

観察時の筆記と録音による記録をもとに、時系列に沿って子どもの活動、保育者の援助、環境構成について図を用いた詳細な文字記録を作成し、分析資料とした。この記録からおおまかな活動の流れを読み取って、表3保育の展開としてまとめた。また、表2指導案に記された予想される子どもの姿①～④に関連すると考えられる場面を抽出してまとめ、考察した。

(3) インタビュー調査

対象

5歳児クラスの担任保育者2名を対象とした。

日時

平成28年10月20日(木) 午後2時から午後3時30分まで

場所

5歳児クラス保育室

インタビュー方法

半構造化インタビューを行った。「イロイロトンボ」の絵画指導を振り返り、子どもの活動、保育者の援助について質問をした。特に指導案の作成時に予想した子どもの姿①～④に関して、実際の子どもの姿がどうであったか、保育者はどのように援助をしたか、また子どもの姿と援助を振り返って考えたことを詳細に質問した。インタビューの内容は、ICレコーダーで録音した。

分析方法

録音された面接内容を逐語録化し、分析に使用した。逐語録から、表2指導案に記された予想される子どもの姿①～④に関連すると考えられる面接内容を抽出してまとめ、考察した。

(4) 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、埼玉県私立A幼稚園の園長に研究の概要、倫理的配慮（研究参加への自由意志の保障、データと個人情報の保護、研究結果の公表等）について口頭及び書面にて説明を行い、観察とインタビューの実施、録音についての承諾を得た。担任保育者にも同様に説明を行い、調査を実施した。さらに園長から結果の確認を受け、紀要への論文掲載についての許可を得た。また資料として掲載した子どもの作品については、保護者から掲載の許可を得ている。

3. 結果と考察

観察調査とインタビュー調査から、(1) 保育の展開、(2) 予想される子どもの姿についてまとめた。

(1) 保育の展開

観察記録からおおまかな活動の流れをまとめ、表3に示した。クレパスで描き出すまでの導入に十分な時間をとり、子どもが興味を持てるように配慮している様子が見えてくる。

表3 保育の展開

時 間	活 動
9:35	○朝の挨拶をする。 ○拍手で音遊びをする。 ○虫の話をする。 ・鳴く虫、鳴かない虫など、たくさんの虫の名前をあげる。
9:50	○テーマがトンボであると知り、トンボの姿を考える。 ・トンボがどのような姿をしているか考え、羽の枚数などを確認する。
10:00	○クレパスで描く。 ・予めスケッチブックに保育者が描いておいたススキのような線をヒントにし、思い思いにクレパスで描く。
10:20	○絵具で色を塗る。 ・保育者が準備した2種類の夕焼け空の色から、一つを選んで塗る。
10:40	○片付ける。
10:50	○活動を終了する。

(2) 予想される子どもの姿

指導案に記された予想される子どもの姿①テーマが抽象的で取り掛かりが分からない、②知っている実物のようなトンボのように描けない、③トンボの他の物を描きたい、④トンボそのものに興味が無いの4項目それぞれに関連すると考えられる観察場面とインタビュー調査で聞き取った内容を抽出してまとめ、考察した。

① テーマが抽象的で取り掛かりが分からない。

〈観察場面 1〉

この日に描くものがトンボであると知り、子どもたちがスケッチブックを開く。園長が数人の子どもを前に出てくるように促して、洋服の様々な柄をみんなに見せながら話す。園長が「こんなしましまのトンボもいいと思うな。こんな花模様のトンボと一緒に飛んできたら素敵だと思うな。」と言うと、子どもが「こんなトンボいる?」「虹色いる」「キラキラ」などと答える。

〈インタビュー 1〉

さっさと描いて終わる子が多い。その子にはいろんなイメージを投げかけるようにしている。例えば、「一人じゃさみしいよね。仲間があっちからもこっちからもくるよ。」とか。描きたいことが膨らんで描きたせるような言葉を掛ける。イメージが膨らんでいる子には、子どもが言ったことを繰り返すようにする。「いいね。飛んでみたいだね。」とか。

〈インタビュー 2〉

描き出しができない子へのかかわりは、引き出しを引き出せるように、自分でイメージが膨らむようにしている。

〈考察〉

観察場面では、子どもをトンボに見立ててそれぞれの子どもが着ている洋服の柄に注目するような言葉掛けをすることで、「イロイロトンボ」を想像できるように援助していることが読み取れる。トンボの実物を観察して描くのではなく、子どもの空想が広がるように意図した働きかけに、子どもも自由な発想を膨らませて応答したと考えられる。

インタビューからは、個々の子どもがスケッチブックに描いている時のそれぞれの取り組み方によって援助の仕方を変えていることがわかる。想像性が膨らまない子どもへの援助だけでなく、自分なりのイメージを持って描いている子どもを認め、一人ひとりに丁寧にかかわっていかうとしていることがわかる。

② 知っている実物のようなトンボのように描けない。

〈観察場面 2〉

園長が子どもたちにトンボの姿について問いかけ、ホワイトボードにいろいろなトンボの姿を例として描いていく。「あ、忘れちゃった。羽は何枚だっけ?」「困ったな。2枚?」と言うと、子どもは、「ちがう、ちがう。4枚。」と答える。園長が「そうか、トンボの羽、こうかな?」とまた描いてみせると、子どもたちは「ちがーう!」と大きな声で言う。やりとりをしながら、羽の向きやつき方をいくつか例示する。

〈インタビュー 3〉

ススキのようなヒントの線は、トンボがとまれるように描いておいたけれど、トンボが足で止まっているように描いている子はほとんどいなかった。そこを描くのは難しかった。その分、オリジナリティ溢れるカラフルなものや、自分なりに楽しんで虫を描けていてよかった。

〈インタビュー 4〉

ヒントの線を描き足して草むらにしたり、いろんなものにする子どももいた。トンボを縦に描く子が多かった。子どものイメージってこうなんだと思った。

〈考察〉

子どもにとってトンボは身近な昆虫であるが、この年齢の子どもが正確にその姿形を知っているとは考えにくい。観察場面では、保育者がトンボの姿を正確に教え正しく描けるようにするのではなく、間違っただけを示しながら子どもが自分の経験に基づいて考え、想像しながら自分なりにトンボの姿を確認できるように促していることがわかる。友達と共に楽しく考え合うことで、トンボの姿を理解しようとするのができたのではないだろうか。

保育者は、子どもが知っているトンボは足で枝先に止まっているイメージなのではと考えてススキのようなヒントの線を予め描いておいた。しかし、トンボの足を描いた子どもは少なく、ヒントの線は保育者の予想とは別の活用のされ方をすることもあった。計画時に予想したように、足までも実物のようにトンボを描けない子どもが多かったが、保育者はこのことを否定的に振り返るのではなく、自分なりに描いたことを評価している。

また、飛んでいる様子を大人が描く時には、横向きに描くことが多いと考えられるが、何人かの子どもは縦向きに描いていた。これに対して保育者は、縦向きに描くことをおかしいと捉えるのではなく、「子どものイメージってこうなんだ。」と気づき、子どもの見方を発見することにつながった。

③ トンボの他の物を描きたい。

〈観察場面 3〉

今日の絵のテーマがトンボであると子どもたちが知り、子どもが「人間は描かなくていい?」「ちょうちょ、描いちゃだめ?」と言うと、園長は、「今日は、イロイロトンボ、描こう。トンボの家族にしよう。」「トンボの赤ちゃん、しましま、花花、カラフルトンボ。」「さあ、みんなでやってみよう。」と答える。

〈観察場面 4〉

子ども一人ひとりが自分のスケッチブックにトンボを描きだす。子どもが「先生、先生! みて!」と、保育者を呼ぶと、保育者は順に子どもたちの側に行き、しゃがみこんで言葉を掛けていく。「これは? これはなに描いたの?」と言うと、子どもは自分の描いたものを指して「女の子。」と言う。保育者は、「わー、帽子の女の子がいるね。」「いいね。かわいいね。」と言う。

〈インタビュー 5〉

打ち合わせでも話したけれど、「まずはトンボを描いてみようか。」と言葉がけをしようと考えた。子どもが「ちょうちょ、バッタを描きたい。」と言ったら、それはいいかなと思う。みんなが同じ絵を描くことを目標としていない。

ほかのものを描きはじめたときに、虫かごをもっているとか「そういうところに気付いたね。」という。言い過ぎると周りの子も描いてしまうので、その辺は調節しながら言うようにする。

〈考察〉

観察場面3は、描きはじめる前のやりとりである。子どもは、人間も描いた方が良いのか、ちょうちょは描いてもよいのかと、考えて質問をしている。園長は、これらを「だめ。」と決めたり、否定的な雰囲気を作ることはせず、テーマであるトンボへの興味を再度促すようにしている。枠を設けることで、子どもの想像の幅が狭くなったり、楽しく描こうとする気持ちさがれることがないようにと考えてのことだと思われる。

実際に一人ひとりが描きはじめると、トンボを描かない子はいなかったものの、特に女児では観察場面4のように女の子や、他の虫や、虫かごなどを描く子どもが多く見受けられた。これに対して保育者は、何を描いたのか子どもから聞いて、「いいね。」と言ってそれぞれを認めるような言葉を掛けていた。

保育者は、「みんなが同じものを描くことを目標としていない。」と話しており、その思いが「いいね。」という言葉掛けとなって表れていることがわかる。一方、「いいね。」を強調しすぎると隣で描いている他児も真似して描きだし、周辺にいる子どもの絵が同じようになってしまうことが予測できる。これは保育者の思いとは異なる結果であり、「トンボについて自分なりに想像し、描くことを楽しむ。」というねらいが達成できなくなってしまう。インタビューの中の「調節しながら」という言葉から、保育者は、個の表現を認めつつもそれが他児へどのような影響を及ぼすか探り、言葉を選び、思い思いに描けるような援助をしていることが読み取れる。トンボ以外のものを描きたい子どもがいたり予測していても、誰が何をどのように描くかということは、実際に活動を始めてみなければわからない。保育者は一人ひとりの子どもとかかわりながら、子どもの気持ちを汲み取って、適時に考えて援助することを繰り返していると考えられる。

④トンボそのものに興味がない。

〈観察場面 5〉

8

園長が「夕べ、寝ようと思ったら幼稚園の方から虫の声がいっぱい聞こえてくるんだよ。」と子どもたちに投げかけて虫の話始める。

「ウマオイってどんな鳴き声？ 知ってる？」と続けると、

子どもが「ちょんちょん。」「ちょんちょん虫」と答え、笑いが起きる。

虫の鳴き声のクイズをした後で、「虫のこえ」を歌う。

園長が「ここに鳴かない虫がピューっと飛んできて、ヒュッととまった、なーんだ？」と問題を出すと、

子どもは、「クワガタ」「バッタ」「カマキリ」などの虫の名前を挙げるが、テーマであるトンボがなかなか出てこない。
園長が「○○先生が知ってるかもしれない。ちょっと来て。」と呼びかけると、保育者が両手を広げて飛んできて止まる動作を子どもに見せる。
子どもたちから「トンボ！」という大きな声があがる。

〈インタビュー 6〉

子どもを引きつけるはじまりの話があったので、そんなに感じなかった。子どもと一緒にトンボを体現することで、興味を向けることができた。トンボなんてわからないから描かないというのはなかった。

〈インタビュー 7〉

トンボが思ったよりも出てこなかった。そこまで出なかったらどうしようとか、打ち合わせはしなかった。咄嗟にやったこと。園長先生についていって進めた。
誰かに合わせてついていく。でも、違う方にいっちゃったなと思うこともある。
途中で、他の先生と相談をすることも。それで、「このくらいにしよう」とか、「今日はここまでにしておこう」とか、言うこともある。

〈考察〉

トンボそのものに興味がない子もいるのではないかとの予測から、興味がない子どもも興味を持てるようにと導入が工夫されている。時間も十分に掛けてクイズや歌を交え、子どもと楽しくやりとりを重ねていくうちに、トンボを描こうとする意欲につながったと考えられる。トンボを描かない子どもが一人もいなかったのは、友達とみんなで楽しく取り組めたからであろう。

鳴かない虫の名前を答えるクイズをしたが、「トンボ」の名前がなかなか挙がらなかったため、園長の呼びかけによって保育者がトンボになって飛んできて止まる姿を体で示した。子どもたちからトンボの名前が出なかった場合、このような援助をすることは事前に相談していたわけではなく、一人が瞬時に判断して始めた展開の意図を他の保育者が読み取ってつなげたものである。

保育の実際は、予想に基づいて計画した通りに展開されていくとは限らない。保育者一人が子どもと対しているときはどう援助するか自分で考えて実践することになるが、この場面のように複数で指導にあたる場合には、連携がうまくいかないこともあると保育者は話している。

インタビューでは、「途中で相談することも。」と言っていることから、計画した通りに保育を推し進めようとせずに、子どもの実態を把握しながら計画を変更し、援助の方法を変えることがあるとわかった。

4. 総合的考察

これまでの考察から、保育者は予想した子どもの姿を考慮して、集団全体に対しては子どもの興味を促すために働きかけたり、子どもの言葉に応答して理解を促したり、イメージを膨らませるようなやりとりをしていることがわかった。また、個々の子どもに対しては、保育者から積極的に働きかけるといよりはむしろ、子どもの言動を待つ姿勢が多くみられた。一人ひとりの姿を読み取って、子どもの持つイメージを引き出したり、手がかりを与えたり、共感したり、表現を受け止めて認めたり、言葉掛けを工夫して援助していた。

山本 (2016)⁵⁾ は、保育者の援助の実態について調べ、見守る、受容、協同、示唆、誘導、主導、関与なしの7タイプに分類し、多様な援助のタイプで子どもにかかわることが子どもの主体性を育てると述べている。本研究の絵画指導場面においても、保育者が多様な援助をしていることが明らかになったことから、子どもが主体的に取り組めるような指導であったと考えられる。

観察からは、おおむね予想した通りに子どもの姿が表れ、計画した通りに指導が行われたように読み取れるが、インタビューと合わせて詳細に分析すると予想通りではないこともあり、その都度、援助の仕方を考えて判断していることもわかった。

子どもの姿によって援助の仕方や指導の方法を適切に変えていくためには、丁寧に予想をしておくことが重要だと考えられる。子ども一人ひとりの顔を思い浮かべて予想しておくことが、適時に求められる判断を適切なものにする手がかりになると考えられる。保育者が、子どもが縦に描いたトンボを見て新たな発見をしたのも、予想していた姿があったからこそこのことであろう。

複数で指導にあたる場合には、指導案作成時に子どもの予想を含めて十分に話し合うことが必要である。話し合う過程で挙がった意見も貴重なものである。予想と異なる子どもの姿に対する時の判断に役立ち、連携して保育が展開できると考えられる。

本研究におけるインタビュー調査では、筆者が進行しながら保育者に語ってもらったが、振り返ったことをどのように評価し、改善へつなげていくかというところまでは、深く分析ができるような資料が得られなかった。このため、評価し改善から次の実践までの過程については検討していない。計画を立てて実践し、実践を振り返って評価し、改善していくPDCAサイクルが重視されつつある今日、特に評価と改善について保育の現場と共同しながら研究していく必要があると思われる。松延 (2013)⁶⁾ は、指導計画と実践事例を検討し、指導計画の様式を改善することを試みており、指導計画に記載する項目の中に、評価の観点という項目を設けて、ねらいとは別に評価の基準を明確化している。

山本 (2016)⁷⁾ は、改善を目標として評価を行う必要があることを指摘し、評価と改善の仕方を具体的に示している。幼稚園教育要領にも記されているように、指導の過程を振り返りながら幼児理解を進め、工夫して評価し、改善していくことが望ましい。

本研究の対象幼稚園では、絵画指導後に指導にあたる4名での話し合いの場を設けており、これが次の実践へ活かされているようである。具体的にどのような記録を基に評価をして改

善しているのかを探ることで貴重な示唆がえられるであろう。評価に生かす記録については、今井(2009)⁸⁾が様式の例を示し、園独自の評価基準を作って複数の保育者で評価することを説明している。日々の保育後の限られた時間を有効に使って評価ができるよう、園全体で評価基準や記録の様式を考えることも大切である。

今後は、遊びや生活などの様々な活動場面を対象として、保育記録の取り方や、記録の読み取り方を含め、評価と改善についても研究していくことが課題である。

5. おわりに

幼稚園における絵画指導場面を観察し、保育者へのインタビュー調査を行った結果、子どもの姿を予想して指導計画を立てることの重要性が改めて確認された。保育者は予想した子どもの姿を考慮して様々な援助をしていることがわかった。また保育の展開において、予想した姿とは異なる子どもの姿が現れた時には、適時に判断して援助の仕方を変えたり、工夫したりしていた。

保育における教育課程や指導計画について更なる研究を重ね、保育を学ぶ学生への指導にも役立てていきたい。

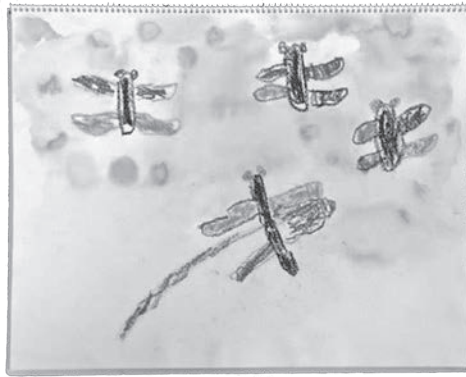
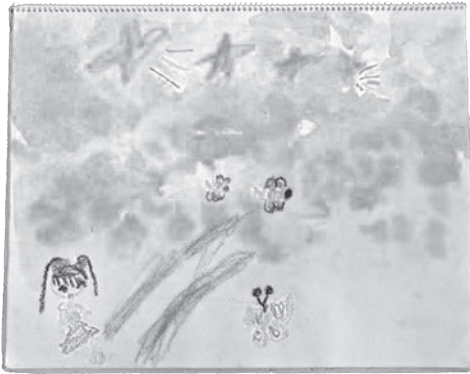
謝辞

本研究に取り組むにあたり、貴重なお話を聞かせてくださいました埼玉県私立A幼稚園の園長先生には、深く感謝いたします。また、研究に協力してくださいました先生方、園児の皆様、作品の掲載を快く許可してくださいました保護者の皆様には、心より御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領』平成29年告示
- 2) 岡本定男、飯尾雅典「幼稚園教育における教育課程の意義及び編成の方法についての一考察～幼児における「表現」活動の今日的課題を解く～」『教育実践研究指導センター研究紀要』第8巻、1999、p.29-40.
- 3) 門松良子、井戸和秀「幼稚園教育課程と指導計画の関連」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第6巻、2006、p.89-100.
- 4) 林富公子「幼児期の教育課程と指導計画に関する研究の動向—日本保育学会における口頭発表(1985～2009)を中心に—」『園田学園女子大学論文集』第45号、2001、p.259-267.
- 5) 山本淳子「子どもの主体性と保育者の援助のタイプの検討(2)—子どもの活動における保育者の意図と子どもの意志についての一考察—」『大阪総合保育大学紀要』第10号、2016、p.257-270.
- 6) 山本睦『保育教諭のための指導計画と教育評価』ナカニシヤ出版、2016、p.45-63.
- 7) 松延愛美「幼稚園教育における指導計画の様式と指導の改善」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第12号、2013、p.37-43.
- 8) 今井和子『保育を変える 記録の書き方 評価のしかた』ひとなる書房、2009、p.154-178.

資料



12

作品例